

文明は文字だけではない——世界に通じる日文研へ

ウイーベ・カウテルト

二〇数年前に私は研究員として、国際日本文化研究センターに一年間所属していた。それは丁度洛西センターにあった仮の研究所から現在の建物に移る時期でもあった。仮の日文研の下にはショッピング・センターがあり、ビールとおつまみを買ってきてセンターの仲間とゆっくりお喋りする晩が多かった。設立直後の生き生きとした、将来に向かった動きを感じるのが毎日の現実であった。『新・日本学誕生——国際日本文化研究センターの25年』からもその設立当時の理念が読み取れる。つまり、保守的な学術や封建的な学会を基礎としたアカデミズムの流れに一石を投じて、学際的に研究を行う。日本が誰にも理解出来るはずもない国と民族であれば学術的な発展も望むべくもなからうが、特別な国と民族ではない、世界の一つであるために外国の研究者は欠かせない。「国立」研究所ではあるが「国際」、外国で日本文化を研究する人を積極的に受け入れる。蝸壺、井の中の蛙という研究姿勢ではなく、世界に通じる知識を生産する。研究成果を出せるような方法として共同研究を制度的に導入する。共同研究は分野、領域を超えて、科学と人文の有機的な結びつき、総合的、学際的、国際的な研究姿勢を取る。いかにも有効なやり方であり、間違いなく結果を出せ、確かに日文研の動力でもあると同様に、日本と日本人は大分世界に通じる国や民族になったのではないだろうか。

日文研は「バブル期」に設立された機関でもある。建物をみるとその贅沢な時代の面影が

すっかり残っていて、様々な種類や色の御影石の階段から建物に上がる。コモンルームの庭にあるテラスにはデザインされた壺の彫刻が左右に置かれており、公共のオフィスビルとは思われないほどデザインに凝った景色がみられる。経済面の贅沢とともに精神面も大らかで、立派な理想を生んだとも言えるだろう。若かった日文研は時代とともに熟成し、設立当時の理想からもむろん変化があったに違いない。

振り返ってみると、バブル期の物質的贅沢や思想の大らかさは批判できないこともない。この様な批判は設立当時にもあったにもかかわらず、日文研は徐々に権威と信用を高めたながら、手に入れた贅沢すぎる研究所への批判も乗り超えた。しかしバブル期を越えた日本は緩やかな（マイナス）成長の時代に入り込んだ。財政縮小が将来の現実になり、高齢化社会とともにこれからの何十年間の縮小や圧迫の時代は間違いないと近づいてくる。精神的には、大らかというよりも恐怖感、未来に対しての見通しが暗くなるのが当たり前の風潮になってくる。将来が見えにくくなれば、人間は心理として心配第一になり、慣れ親しんだ範囲の安全な世界観にもどる。研究者は革新的な創造活動をするよりも安全な道にとどまり、ただ確実な資料やデータの整理に引き込まれる。つまり、蛙が井戸に、蝸が壺にこもるような姿勢になる。

一〇年後の日文研について何か書いてくれないかとの依頼を受け、私なりに思いつく事をあげてみた。日文研は設立当時の理想の上に立ち上がっており、将来に向かってても根本的に同じ路線で考えれば良いのではと思う。設立当時の大らかさを伸ばして未来の方針として開拓するのは理想と現実のぶつかり合いから分析できよう。現実には今日の文明には色々な問題がある。それに向かつて理想の力を得、問題の中に研究し論争する現場を見つけた。たとえば、資源争いと地球温暖化は現実的な文明滅亡へのテーマである。私の専門ではないにしても、世界人

口は安価な石油と無限の資源という空想での経済成長を遂げたが、無限と思われた資源は無限ではなく、経済成長や人口増加にも限りがあり、パブルは何億年もの人類進化から言えば、短期間の薄っぺらな現象にすぎない。今のような生活水準を全世界人口の一人一人が達成できるはずもない。一人の人間が生命維持のために使える資源量が減少する時期が始まり、生活水準が生存レベル以下に下がる地方が増える。京都が憧れの場所としてしばらく栄え続けているにもかかわらず、もっと離れた地方、あるいは開発途上国は将来寂れていくしかない。寂れる所に対して栄える所の「栄え」も不安定になり、いつか、なにかの形でバランスが崩れる可能性も否定できない。その時にどれほど革命的な変化が起こるのか、それとも緩やかなスライドになるのかは分らない。資源の食い荒らしにともなう地球温暖化は政治家の責任よりも大きな世界の動きになり、誰の力でもくい止める事はできなくなりつつあると云われている。その不安と問題の中で日本文化の研究はそれに先立って、目を開けて文化への影響を意識し、理解し、創造性を持つべきであり、未来への責任は日文研にも託されていると思う。

私個人の考えで研究方針について言わせてもらえば、物理的に測る事が出来る日本の「環境」に対しての意識や策略を重視すれば良いのではないだろうか。自然哲学者が指摘するように、今の文明はなんらかの形と方向で「環境」と仲良く進む必要がある。「環境」の自然科学的理解はかなり進んだが、「人文」の領域での環境意識は低すぎるように思えてならない。あるいは別の言い方をすると、自然科学でも、人文科学でも、無責任にそれぞれの「純粋」な道だけを歩むようになった。それは今やありえない時代になった。人文学の研究活動において「自然科学」の分野をしっかりと把握、理解し、「人文」領域の資料の一つとして、自然科学を取り入れるのは大切な事だと思う。その実践的作業は最近だいたい簡単になり、あらゆるデー

がウェブで検索できる。分析と判断は歴史的資料や文学的資料などと同じ学術的方法で出来る。理科系、物理学のデータは人文系の研究者にでも簡単に活かせる研究成果になってきた。情報社会がその豊かさを持ち込んでくれた。GISのデータは歴史のデータと合わせて新たな研究ができるし、将来に向けてのモデル作りも可能である。人文科学と自然科学との境界線を打ち壊して文明の総合図を示す責任が日文研にあると思う。発掘学とGISの研究は当然として、人文学の中でもそれぞれの領域の境界線が消える傾向は日文研に既にある。つまり、日本史・人類学・文学、それぞれの専門発表に色々な分野が重なり合い、新たな結論が導き出せるようになる。これはいかにも日文研らしい研究のように思う。私の研究テーマである都市文化から言わせてもらえば、都市形成は人類の歴史や文化を、ただ「人文」の資料のみから分析するだけでは足りないように思う。「自然科学」の地理を含め、相互関係の分析によりまた新たな都市計画環境戦略を開拓できる。別の例を挙げると、私の「日本庭園」研究も、歴史、美学や社会的な見方から出発し「環境論」のなかに場を変えて「日本庭園」を組み直すという研究論である。結果的に「日本庭園」からは環境問題に対してまた新たな教示を得られる事によって、環境や社会変化の中における「庭園文化」の新たな意味を開拓することができる。この取り組みは近いうちに本として出版する予定で、その研究方針を実践したものの一つである。

現在、日本のもう一つの文明問題は高齢化社会の進展である。高齢化とともに時間の感覚が変わる。現実が暗く、将来は見難くなっていく。逆に過去ははっきりと見え、老人は昔懐かしい事を思い出しながら死に向かって行く。「現実」と「将来」を把握することはもちろん日本文化にとって望ましい方向であり、未来と将来、イメージションをテーマにする方針を共同

研究において重視する。「歴史」を研究するにも、むしろ「将来の歴史」テーマを見抜くことが価値ある結果になるだろう。私の分野からいうと、たとえば「植民地満州の都市計画の理想家たち」や「万国博覧会の歴史的将来像」が必要な研究テーマである。もちろん高齢化に悩まない国々は将来に向かう力を自然に握っている。その「若い国」の将来を意識する研究も迫力があるに違いない。

資源争いととも貧富の差も激しくなる、国内にも国外にも財力を持つほうが有利であり、さらに手に入れるため格差が大きくなる一方である。その文明の方向性から見ると日文研の研究方針がどう変わるか、あるいはどのようなスタンスを取るのか。私はその専門家ではないので、まず常識的に考えると、国民に対して「先生」というエリートは自分の存在権を確保するかどうか。尊敬され、信頼できるセンターでなければ、生き残る価値もない。尊敬と信頼は「しっかりした研究」を基礎にしたアピールする発言から得られる。研究は根本的にいえば資料や情報の上での作業である。図書館や情報部がそのための基礎的な作業を提供しているにもかかわらず、研究者がしっかり分析と判断するための情報や資料を把握していないと研究者としての信頼を得られることもない。「羅漢」の気分だけで「面白い」事をするのでは不十分である。面白いテーマはマスコミに取り上げられやすいし、大衆は喜ぶのだが、あくまでも「面白さ」は作戦上だけで、研究の質とテーマの内容は別のレベルが求められる。日文研のバブル期から現在までスターを出さないと注目を引かない時期があった。もちろんスターはある意味で大きな存在であるが今後はオピニオン・リーダーに代わる傾向がみられる。オピニオン・リーダーは文化を研究する日文研の中から出て、国民の目を引く重要な文化的テーマを紹介する。そういうリーダーにならうと思えば、皆が興味あるテーマに対してオピニオンを出さない

とリーダーにはなれない。あるいは、もっと卓越した話、つまり皆が考えもつかなかったテーマを上手に見つけて開拓するのもいいだろう。今の時代、研究者にとっては恵まれているほどのテーマが眠っている。資源減少、高齢化社会、貧富の差が激しくなるにつれ、日文研と所属する研究者の権威と信頼をもっとしっかりと維持する必要があるのだから、日文研の文明に対してのリーダー的な役割をさらに期待できるのではないだろうか。

日文研はこの二六年の間にもしっかりと地域意識を定着させてきた。桂坂および京都市民達とのかかわりは相互通行の働きとして意識され、地域側の支えと日文研側から地域への参加はお互いの関係を持続的に維持できるだろう。「出前授業」の形で桂坂小学校で講義するのはすばらしい発想であり、近所の子供に紙芝居を上演するのにもとても賞賛すべき事である。中学校についてはその余裕がないと耳に入ったが、桂坂中学校にも別の形で、年一回、社会学の出前授業をやってもいいのではないだろうか？ ハートピアでのフォーラムも同じ様な意味でおいに役立っていると思う。外国人の研究員が京都市民の前で学術的な講演を行うのか、あるいは市民が喜ぶような話をするのか、どちらにしても、お互いの関係を維持する結果になるように思われる。日文研の偉い先生方が象牙の塔から降りて、コメンテータとして市民の前に出ることにもなる。それを考えると、フォーラムのスピーカーとコメンテータという立場を抜きにして、互いに平等な立場で同じテーマについて小さい講義や議論を行う形の方が効果的ではないだろうか？ この小さな疑問は別として、出前授業とフォーラムは地域レベルで相互のギャップを埋める有効な対策にもなっているように思う。一〇年間のこれから先マイナス成長後、今豊かに見える桂坂も雰囲気が変わるだろう。どんな荒波があろうとも地域とのギャップを出来るだけ小さく維持するのも大切な事である。

地域だけでなく、国同士でも貧富の差が激しくなる。日本人の一人当たりのエコ・フットプリントはインド人の約五倍、インドの人口は日本の約一〇倍程である。その事実を考えると日本の文化研究はどうなるのか？ここからもまた資源をもっとフェアに分けないといけないという意識に繋がる。インド等の文明力・文化力が大きく、エコ・フットプリントが小さい国々の研究者を積極的に日文研に招聘して「文化の力」を研究し、学びの重点を置く。「経済成長を批判するのは政治的な発言に見えるかもしれないが、実は今の時点では文明と資源の簡単な計算だけの話で、現実には文明・文化研究が一番大きなテーマではないかと私は考える。

日文研は皆の税金で運営されているともいえるから、その国益はどこにあるのかとの疑問もこれから変わるのでないだろうか。そもそも「国」とはなにか「益」とはなにか。若い学生に尖閣諸島の問題を聞いてみると「あ、あれは国の問題でしょう」、「政治家の手下なパフォーマンス」等との返事が返ってくる。その学生にとっては「私の問題じゃない」との事である。すると「国」イコール「東京の政治とその金を振り分ける権力」にあたる。その若い学生が将来の社会を代表するのであれば、これからの「国」は「日本文化」より小さい存在が現実になりうる。日文研の研究者たちはもちろん権威ある信頼できる研究者でありながら、薄い存在になった「国」よりも「日本文化」に対して責任を持つのは当然である。「国」の言う通りにする必要はなく、正直に事実を言うことの方が優先だろう。「国」のための「益」は研究者の独立判断で、文化の益にもなりうる。そのため努力はエリートである研究者の責任につながる権威でもあるだろう。

日本人には「時間」、「空間」、「自然」、「物」や「人間」を細かく観察し、言葉や芸術で微妙

に表現する豊かな能力がある。私が外国人として日本文化を研究するのはその楽しみと重要性のためであり、自分の世界観はこれらによって広くなった。世界文化から見ても日本にその価値はあるのかと他の研究者からも聞かれるが、それぞれ自分が育てられた国が世界一というのは誰にでも共通している。もちろん日本人が細かく見るのは、まず日本国内の世界、世界に限りのある日本だけの文化である。その日本文化の研究を外国人に理解させるのも日文研の設立当時の声であった。人に事を理解させるのは根本的にいえば大人同士というよりも親が子供にさせる事であって、ただ単に外国人に日本の文化研究を理解させるのは一方的なプロパガンダにすぎない。下手をすると日本はまた、誰にも理解できない特別な文化を持つ民族と国になる。相手になにかを理解させようと思えば、まず相手を理解しないと、きちんとしたコミュニケーションにはならないだろう。世界に通じる為の日本文化研究の基礎は世界を理解することである。世界の学者の多くは自国語以外のいくつかの言語、たとえば中国語、英語、ロシア語などで日本の文化を研究する。それは「間違いない」とは云えないだろうし、日本人研究者の行う日本文化の研究とは「違う」観点からの研究にあたる。場合によってはその違う観点とは用語と方法論にあり、日本国内のみの研究内容よりも優れた結果を出す場合も十分にありうるだろう。国際的に、世界に通じる研究のやり方、用語、方法論、パラダイムなどを把握しないと日本文化研究は辺鄙な島国のわけの分からない人たちの、日本以外には誰にも読まれない本に終わってしまう。私の専門とする分野では論議に参加するのは「外国人」ばかりで、日本人は発表はしても論議となると顔がほぼ見当たらないのが現状である。日本文化研究を世界の人達と同じやり方で行うならば、発表のみではなく、論議のパートナーとしての一員になり、国際会議のスピーカーとして今以上に参加する。その上で、本当の意味での相互理解が生まれてく

る。今の文明問題は地球全体におよぶ問題である。日本文化研究も世界に通じる様な研究を進める必要がある。日本全国を考えると日本の文化について、唯一「国際」研究を行えるのは桂坂の日文研しかないといわれる様に、特殊で独自の重責ある活躍の場であり、もっとも世界に通じ、益々世界から尊敬される日文研になって欲しいと望んでいる。

(ソウル国立大学准教授／日文研外国人研究員)

国民文化研究と文明論的転移

酒井直樹

(一) 戦後国民文化論の前史

「近代とは何か」については多様な理解があり、必ずしも簡単な定義が受けられているわけではありません。しかし、全地球的な世界像が始めて成立した時期のことを近代の端緒とする見解は広く受け容れられているのではないでしょうか。ヨーロッパ人によるアメリカの発見と、それまでにはなかった新しい形式の政治的正統性の出現を近代世界の特徴として考える論者は少なくありません。近代は始めて「ヨーロッパ」と呼ばれる、普遍主義的な神政的權威なしに政体が併存する地域が可能になった時代であり、そのヨーロッパが「アメリカ」(America)と自らを対比しつつ自己画定するようになります。「アメリカ」の発見が一五世紀末の出来事